

Total Rehabilitation Research

Printed 2014.2.28 ISSN2188-1855

Published by Asian Society of Human Services

*F*ebruary 2014 **1**
VOL. **1**



Youngdoo YOON
[Modern Times]

SHORT PAPER

日本版 Successful Aging 評価尺度開発のための 基礎的研究

金 紋廷¹⁾ 韓 昌完²⁾

1) 東北大学大学院経済学研究科

2) 琉球大学教育学部

<Key-words>

サクセスフル・エイジング、高齢化、老化、サクセスフル・エイジング尺度

moonjung87@gmail.com (金 紋廷)

Total Rehabilitation Research, 2014, 1:76-86. © 2014 Asian Society of Human Services

I. 研究の背景

1. 急速な高齢化の進展と健康寿命の延長

21世紀以後、少子化と平均寿命の延長によって人口の高齢化は世界的な問題になった。特に、日本の高齢化は世界に例をみない速度で進行して平成25年『高齢社会白書』によれば、総人口に対する65歳以上の高齢者人口は、過去最高の3,079万人（前年2,975万人）となり、総人口に占める割合（高齢化率）は24.1%となった。総人口が減少するなかで高齢者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2060年には39.9%に達して、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となると推計している。

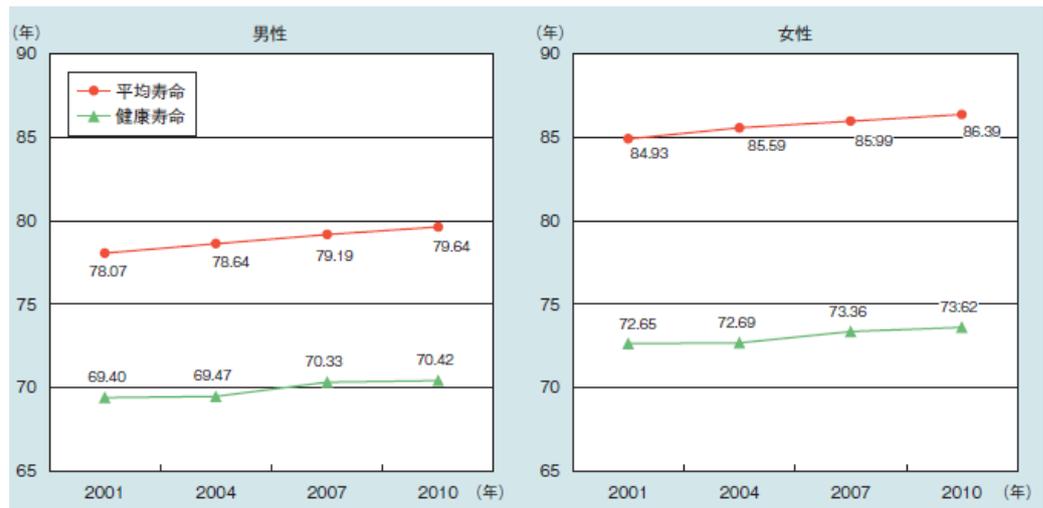
高齢化は、高齢者の個人的な問題だけではなく、社会・経済に影響を与えるため、社会保障の側面から高齢者の最低限度の生活を保障する目的で健康・福祉、学習・社会参加、経済活動・所得保障などの多様な制度が行われている。しかし、以前と比べて最近では経済的余裕を持つ高齢者や社会的活動へ積極的に参加する高齢者の割合が増えており、さらに健康寿命が延長(図1)されることによって最低限度の生活保障よりは高齢者の生活の質向上に焦点が当てられている。

また、比較的健康な高齢者の増加により、高齢者をエンパワーメントや生産性を持つ存在として捉える視点へとパラダイムシフトの必要性が迫られている(藤田ら, 2004)。

Received
January 3, 2014

Accepted
February 10, 2014

Published
February 28, 2014



出典：内閣府、平成 25 年高齢社会白書

注)平均寿命は 0 歳の平均余命であり、健康寿命は日常生活に制限のない期間である。

図 1 平均寿命と健康寿命の推移

2. 老化(Aging)に関する意識変化と Successful Aging の台頭

これまで「老化(Aging)」は、疾病、孤独、貧困などのネガティブな概念として理解されていた。しかし、前述したように最近では高齢者の経済的水準の向上や活発的な社会的活動によって老化に関するイメージが変化し、老化は自律、成熟、発達などのポジティブな概念として表現されている。また、高齢者の教育水準も高くなり、幸福で健康な老後を迎えるためのニーズが高まっている。

Successful Aging は、以上のような老化に関する意識変化と幸福な老年期を迎えようとする高齢者の増加によって注目され、医学、心理学、社会福祉学、教育学など多様な学問分野にて研究が試みられている。

最近には制度的措置ではなく、高齢者の自発的な自己管理を通して Successful Aging を達成していくなかで、高齢者の生活の質が向上され、介護予防も同時に達成できるということから Successful Aging に関する関心が高まっている。

米国では、1987 年 John W. Rowe (老年医学者)と Robert L.Kahn(社会学者)により提唱された Successful Aging モデルが注目され、1990 年代から老年学分野にて活発的に研究されてきた。Rowe & Kahn(1987)は、Successful Aging について①病気や病気に関連する障害の発生の可能性が少なく、②高い水準での身体的・認知的機能があり、③社会や生産的活動へ活発的に関わることを定義しており(図 2)、Successful Aging の基準として「自立(independence)」と「生産性(productivity)」の維持を挙げている。

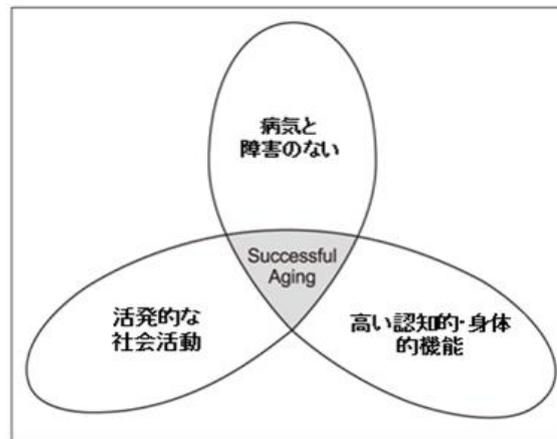


図 2 Rowe & Kahn による Successful Aging モデル

一方、Successful Aging に対する定義や評価基準は研究者によって、また国によって異なる。日本でも Successful Aging に対する定義は研究者によって見解が異なっているが、Successful Aging の評価基準は、一般的に米国の Successful Aging モデルに基づいている。

しかし、国の社会的・文化的特性によって高齢者の特性も異なってくるため、日本の高齢者を対象として Successful Aging の規定し評価するためには、日本の社会的・文化的特性と高齢者の特性を考慮した日本独自のモデルや基準が必要であろう。

II. 研究目的と方法

本研究は、日本の社会的・文化的特性を考慮した日本版 Successful Aging 評価尺度を開発するための基礎研究である。

そのため、本研究では、Successful Aging に関する先行研究のレビューを通して日本における Successful Aging の定義と規定要件について検討する。特に、日本と同様のアジア文化圏であり、高齢化が急速に進んでいる韓国の場合、韓国版 Successful Aging 評価尺度を開発する目的で広い分野にて研究が行われているため、韓国の先行研究が日本に示唆することについて考察し、今後日本版 Successful Aging 評価尺度を開発するための研究的課題を提案することを目的とする。

III. Successful Aging の定義と規定要件

1. Successful Aging に関する定義

前述したように、Successful Aging に対する定義は研究者によって、また社会的・文化的特性によって異なっており、異なる定義によって Successful Aging を規定する要件または評価基準も異なる。

アメリカの教育心理学者 Havighurst(1961)と Rowe & Kahn(1987)などによれば、Successful Aging とは、高齢者の生活満足度や幸福感という主観的意識を最大にするための生活条件を研究する研究分野であると定義しており、日本でも米国の定義をベースにして Successful Aging を定義している。

Successful Aging に対する定義の一つとして小田(1993)は、Successful Aging とは、年齢による喪失の衝撃を最小限に食い止めながら、肯定的な分野拡大の方法を見出し、人生に納得し満足して過ごしているプロセスとして、加齢変化に上手く適応するためにいかに自己を調整しているかということに焦点をあてるモデルであると定義している。また、類似する定義として谷井(2001)は、海外文献のレビューにより、Successful Aging について加齢現象に伴うプロセス概念であり、加齢変化に上手く適応するためにいかに自己を調整していくかに焦点を当てて低下や喪失した機能を取り戻すのではなく、それに変わるものを選択し、あらゆる資源を活用し、自己を最適な条件下で生きられるように新たな環境に挑戦していくことであると論じている。

一方、高齢者の QOL に着目して HAN(2013)は、Successful Aging とは老化、経済的生産活動からの引退など、加齢にともなう身体的、心理的、社会・経済的な変化の中、QOL のレベルを維持しつつ、老年期という人生の一定時期を豊かに迎えていることと総合的に定義している。

ここでは、以上の先行研究から Successful Aging に関する定義をまとめて Successful Aging は QOL のレベルを維持しつつ加齢変化にともなう身体的・心理的・社会的・経済的变化にうまく適応するために自己を調整し、老年期を豊に迎えることと定義する。

2. Successful Aging の基準及び要件

前述したように、Rowe & Kahn(1987)は身体的、精神的健康と社会活動を Successful Aging の基準としており、その他の研究でも Successful Aging の基準について大きく①身体的要件、②精神的・心理的要件、③社会的要件の3つにまとめている。特に、精神的・心理的要件は、自己満足や生活への満足から評価されている。

Schultz と Heckhausen(1996)は、Successful Aging の基準は疾病がない身体的な健康であると主張し、Strawbridge(1996)は、Successful Aging の予測要因として地域社会への積極的な参加と精神的健康を挙げた。また、Mannel & Dupuis(1996)と Campbell(1981)は社会的要件として高齢者の経済的活動は、高齢者の自律性向上に肯定的な影響を与えるため、Successful Aging に繋がると論じた。

一方、嵯峨座(1993)は、Successful Aging とは年齢とともに、老いていくことを認識しつつ、これを受け入れながら社会生活にうまく適応して豊かな老後を迎えていることと定義しながら、長寿、健康、満足、活動の4つを Successful Aging の要件として挙げた。しかし、日本では、米国の先行研究に基づいて Successful Aging を評価する傾向があり、日本の社会的・文化的特性を考慮した Successful Aging の基準及び評価項目については整理されていない状況である。

IV. 韓国の Successful Aging 評価尺度開発のための研究動向

1. Successful Aging の規定要件に関する研究

韓国では多様な学問分野にて Successful Aging を規定する要件に関する研究が行われている。HAN(1993)は、Successful Aging の規定要件について医学的、生物学的、社会学的な側面から分析している。HAN(1993)によれば、Successful Aging は寿命、生物学的な健康、精神的な健康、認知的な健康、社会能力と生産性、生活に対する満足などに関する量的・質的

要件によって評価される。また、KIM(1989)の研究では、老年期に生じる身体的・心理的・社会的な変化による問題に適応することを **Successful Aging** の主要な要件であると論じ、CHOI (2005)は、生活に対する現実的な満足感によって **Successful Aging** が評価されると論じた。

これらの研究以外にも **Successful Aging** の規定要件についての研究をまとめてみると以下のようなになる。

1) 社会経済的な要件と **Successful Aging**

JEONG (2007)は、社会的位地と教育水準の向上が **Successful Aging** に関連があり、社会経済的な位地によって **Successful Aging** の予測ができると論じた。また、KANG(2003)とBEAK (2005)は、性別、教育期間、配偶者の有無が **Successful Aging** を規定する重要な要件であると論じた。

2) 自己満足と **Successful Aging**

JEONG (2007)は、**Successful Aging** に影響を及ぼす要件を分析した結果に基づいて「自己満足」という要件は **Successful Aging** を説明する重要な要件であると主張した。また、PARK(2006)は、老年期における自己満足は、肯定的な思考に繋がり、老化または老年期に対するポジティブなイメージを作り出すため、**Successful Aging** とも関係があると論じた。

3) 社会的活動と **Successful Aging**

Knight & Ricciardeli(2003)によれば、社会活動に積極的に参加するほど生活に対する満足度が高くなるため、「社会的活動」という要件は **Successful Aging** に影響を与えると論じた。社会活動と **Successful Aging** に関する研究は、韓国でも行われ、PARK(2006)と KIM(2011)の研究によれば、趣味と余暇生活、宗教生活、文化生活などの社会的参加によって高齢者の生活に対する満足度が向上すると論じている。

以上の先行研究に基づいてみると、韓国における **Successful Aging** の規定要件は、主観的な満足感として社会経済的位地、自己満足、趣味や宗教活動などの社会的活動であるといえ、日本の嵯峨座(1993)による **Successful Aging** の4つの規定要件(長寿、健康、満足、活動)と類似していることが分かる。

2. 韓国の **Successful Aging** 評価尺度の開発に関する研究

韓国では、2000年代から高齢者の急速な増加とともに **Successful Aging** に関する研究が活発的に行われている。そして最近では、従来の米国で開発された米国の高齢者向けの **Successful Aging** 評価尺度ではなく、韓国の社会文化に応じた韓国版評価尺度の開発が活発的に行われている。

韓国版 **Successful Aging** 評価尺度を開発した代表的な研究として KIM&SHIN(2005)による研究が挙げられる。KIM&SHIN(2005)は、先行研究に基づいて韓国の首都圏地域の65歳以上の高齢者を対象として大きく①自己満足、②子供の成功に対する満足、③夫婦間の満足、④自己管理の4つの要因から構成された評価尺度を開発し、評価項目に関する妥当性を検証した。

その他にも多様な分野において韓国版評価尺度を開発するための研究が行われている。そのなかで、代表的な研究をまとめてみると以下ようになる。

1) 韓国における老人の Successful Aging 尺度開発のための研究

KIM(2008)は、韓国の65歳以上の高齢者を対象として韓国版 Successful Aging 評価尺度を開発した。韓国における Successful Aging の概念を抽出するため、高齢者を対象とした面接調査を行い、Successful Aging を評価するための78項目の予備項目を開発した。この78項目の予備項目に対する要因と構造を分析し、信頼性と妥当性の分析した後、最終的に31項目の評価項目で構成される評価尺度を開発した。KIM(2008)により開発された韓国版 Successful Aging 評価項目を翻訳して<表1>に示した。

表1 韓国の Successful Aging 評価項目

自律的な生活	1.生活が貧しくても、他人には見せたくない。
	2.自分の人生は子供に依存せず、自ら責任を持って生きていくものであると思っている。
	3.今まで夫または妻としての役割をうまく堪えてきたと思う。
	4.普段、見た目をきれいにするように気を付けている。
	5.今まで親としての役割をうまく堪えてきたと思う。
	6.健康に悪い習慣があったら、なるべく変えるように努める。
	7.子供に経済的な負担はかけないようにしている。
自己管理	1.これからも続いてやりたいと思う活動(趣味、仕事など)がある。
	2.これからの人生で果たしたいと思っている計画がある。
	3.今でも必要と感じるものがあれば、積極的に学んでいる。
	4.現在やっている活動(趣味、仕事など)に対してやりがいを感じている。
	5.健康のためにこつこつと運動している。
積極的な生活	1.現在、社会活動(余暇活動、宗教など)に参加している。
	2.参加している社会活動のなかで、私は役に立つ人である。
	3.本音が言えるくらいの友人がいる。
	4.人見知りをしなく、誰とも友達になれる。
子供に対する満足	1.子供との親子関係が円滑である。
	2.私の子供たちは、親孝行を大切にしている。
	3.私の子供たちは、大人になっても仲の良い兄弟または姉妹である。
	4.子供は私の自慢である。
自分に対する満足	1.私は存在する価値があると思う。
	2.今までの人生について生きがいがあったと思う。
	3.現在、住んでいる家に満足している。
他人との関係	1.悔しいことがあっても長く気にするタイプではない。
	2.若者たちの立場をよく受け入れると思う。
	3.他人のことにいちいち関与しない。

出典：Dongbae KIM (2008) 韓国における老人の Successful Aging 尺度開発のための研究、Korean Journal of Social Welfare, 60(1), p.223 を引用し、著者が翻訳したもの

2) 韓国の中・老年期の成人に対する Successful Aging の尺度開発に関する研究

ANNら(2009)の研究では、高齢者のみではなく、Successful Aging を準備する段階にある中年期の成人に着目し、中年期の成人と 65 歳以上の高齢者を対象としたアンケート調査を行った。Successful Aging に関する項目については、BEAK&CHOI (2005)の先行研究で使われた Successful Aging 関連の 83 項目に基づいて要因分析と項目反応理論 (item response theory)分析を行い、①日常生活に対する安定、②心理・社会的な安定、③自己満足という 3 つの要因で構成された計 26 項目の尺度を開発した。

3) 女性高齢者の Successful Aging 尺度の開発と妥当性検証

JEON(2011)は、教育学的な視点から韓国の女性高齢者に対する Successful Aging の尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。

女性高齢者に対する Successful Aging の予備尺度項目は、先行研究の結果と女性高齢者を対象とした面談の結果に基づいて身体的要因 12 項目、認知的要因 24 項目、心理的要因 46 項目、経済的要因 11 項目、社会文化的要因 29 項目、社会活動要因 25 項目計 147 項目を抽出した。

予備項目は、高齢者教育専門家、高齢者教育専攻の博士研究員に依頼し、3 回の妥当性検証を受けた結果に基づいて計 101 項目(身体的要因 4 項目、認知的要因 16 項目、心理的要因 38 項目、経済的要因 7 項目、社会文化的要因 26 項目、社会活動要因 10 項目)にまとめた。

予備項目を用いてアンケート調査をおこなった結果、最終的に 6 項目の要因(①健康及び日常生活に対する満足、②老化に関する受け入れ、③経済的な安定、④和やかな家庭、⑤配偶者に対する満足、⑥積極的な社会活動)で構成された計 45 項目の韓国版女性高齢者に対する Successful Aging の尺度を開発した。

V. 考察

日本の高齢化率は 2013 年 24.1%となっており、継続的に上昇すると予測している。人口の高齢化は、世界的な問題であり、高齢社会に対する総合的かつ長期的な対策が重要な課題となっている。また、最近では比較的健康な高齢者が増加しており、さらに高齢者の教育水準や経済的水準が向上されたことによって最低限度の生活保障ではなく、生活の質向上に焦点を当てて豊かで幸福な老後を迎えるためのニーズが高まっている。

Successful Aging は、以上のような世界的な人口の高齢化と幸福な老年期を迎えようとする高齢者の増加によって注目を受け、最近には制度的措置ではなく、高齢者の自発的な自己管理を通して Successful Aging を達成していくなかで、高齢者の生活の質が向上され、介護予防も同時に達成できるということから Successful Aging に関する関心が高まっている。Successful Aging を通して高齢者の生活の質を向上させ、介護予防を可能にするためには、高齢者の Successful Aging に関する状況や実態調査が持続的に行われる必要があり、正確な状況把握のため Successful Aging 評価尺度は非常に重要であるといえる。

本研究では、日本の高齢者に適する Successful Aging 評価尺度を開発するための基礎的研究として、国内外の先行研究のレビューを通して Successful Aging に対する定義や基準及び要件、韓国版 Successful Aging 評価尺度開発に関する研究を検討した。

Successful Aging に対する定義について検討した結果、Successful Aging は QOL のレベ

ルを維持しつつ加齢変化にともなう身体的・心理的・社会的・経済的变化に上手く適応するために自己を調整し、老年期を豊に迎えることと定義される。また、Successful Aging の基準は大きく①身体的要件、②精神的・心理的要件、③社会的要件でまとめられ、特に、精神的・心理的要件は、自己満足や生活への満足から評価されていた。しかし、日本の社会的・文化的特性を考慮した定義や基準について検討した研究はなく、主に米国の定義と基準に基づいて適用されていることが分かった。

一方、韓国では多様な学問分野にて Successful Aging 評価尺度を開発するための研究が活発的に行われており、基本的な基準は①日常生活に対する満足、②身体的・精神的な健康、③社会参加とし、この基準を評価するための項目は、韓国独自の社会的・文化的特性を考慮して構成していた。

以上、先行研究を検討した結果に基づいて、今後日本版 Successful Aging 評価尺度開発のための研究的課題を以下のように提案した。

第1に、日本版 Successful Aging 評価尺度開発のためには、日本の社会的・文化的特性を考慮した Successful Aging の定義を明確にまとめるべきである。本研究の文献調査の結果からも分かるように、Successful Aging は加齢による多様な変化に上手く適応し、豊かな老年期を迎える概念として理解されている。一方、加齢に伴う経済的・社会的な変化は各国の社会的・文化的特性を反映するものであるため、Successful Aging を評価するためには、まず各国の社会的・文化的特性を考慮した Successful Aging に対する明確な定義が必要である。しなしながら、日本では、日本独自の特性を考慮した Successful Aging の定義や基準について研究した先行研究が少ない状況である。このことから、今後日本版 Successful Aging 評価尺度開発のためには、まず、日本の特性を考慮した Successful Aging の定義に関する研究を通して Successful Aging の定義を明らかにまとめるべきである。

第2に、日本の社会的、文化的特性を考慮した Successful Aging の定義をベースにして日本版 Successful Aging の評価項目を整理する必要がある。韓国の先行研究に基づいてみると、韓国版 Successful Aging 評価項目をまとめる際には、Successful Aging に影響を与える要因を分析した国内外の先行研究をベースにして予備項目を抽出していることが分かる。また、Successful Aging に影響を与える要因については、身体・心理的要因のような基本的要因から教育的要因及び家族環境的要因などまで多様な観点から影響要因を抽出していることから、今後日本版 Successful Aging 評価項目をまとめる際には、多様な観点から日本高齢者の Successful Aging に影響を与える要因を分析する必要があると考えられる。

第3に、以上の定義と評価項目に基づいて予備評価尺度をまとめ、妥当性を検証し日本版 Successful Aging 評価尺度の開発が望まれる。韓国の文献調査の結果から分かるように、韓国では文献調査を通して抽出した予備項目が実際に韓国高齢者の Successful Aging を評価しているかについて検証するために、高齢者に対するアンケート調査や専門家調査を行った。このことから、今後日本版 Successful Aging 評価尺度を開発する際には、各項目が日本高齢者の Successful Aging をどの程度評価できるかについて検証する必要がある。

文献

- 1) Ann JS (2009) 韓国の中・老年期の成人に対するSuccessful Agingの尺度開発に関する研究.
- 2) Beak JE, Choi HK (2005) 韓国の高齢者が期待する成功的老化の概念と予測要因, 韓国家庭管理学会誌 23(3), 1-16.
- 3) Campbell A (1981) The Sense of Well-being in America New York: McGraw-Hill Publications.
- 4) Cheong BG, Yi GH(2010) The Survey Research on Inter-Generational Difference in the Perception of Successful Aging: An Emphasis on the Social Relationships, 韓国調査研究学会, 45-69.
- 5) Choi HK (2005) 韓国高齢者の成功的な老後に関する研究, 韓国老年学会 25(2), 35-48.
- 6) 藤田千嘉子, 舟木理恵, 松本啓子(2004) 在宅における後期高齢者の枠割の意味,第35回日本看護学会論文集,122-124.
- 7) Han CW(2013) 第1回Asian Society of Human Services 研究者養成研修会
- 8) Han JR (1993) 高齢者の教育課程に関する開発と実践研究, 学位論文.
- 9) Havighurst R.J, Albrecht R (1953) Older People. New York: Longmans.
- 10) Jeong SD (2007) 韓国女性のSuccessful Agingに関する研究, 老人福祉研究 36, 201-220.
- 11) Jeon EH (2011) 女性高齢者のSuccessful Aging尺度の開発と妥当性検証.
- 12) Jo SN (1998) 高齢化社会と高齢者の社会活動, 集門党.
- 13) Kang I (2003) 成功的な老化に対する認識に関する研究, 老人福祉研究20(2), 95-116.
- 14) Kim DG(2008) 韓国における老人のSuccessful Aging尺度開発のための研究, Korean Journal of Social Welfare, 60(1), 211-231.
- 15) Kim JS (1989) 老人の社会的活動と自己満足に関する研究, 学位論文.
- 16) Kim JS (2011) 中年層のライフスタイルが老後準備と生活満足に及ぼす影響, 学位論文.
- 17) Kim MH, Shin KL (2005) 韓国の老人に対する成功的老後の尺度開発に関する研究, 韓国老年学25(2), 35-52.
- 18) Mannel R C, Dupuis S(1996) Life Satisfaction in Encyclopedia of Gerontology 2.
- 19) 松本啓子, 若崎淳子(2006) 高齢者におけるSuccessful Agingに関する研究, 川崎医療福祉学会誌, 16(1), 67-72.
- 20) 内閣府(2012) 平成25年 高齢社会白書.
- 21) 小田利勝(1993) サクセスフル・エイジングに関する概念的考察, 徳島大学社会科学研究, 127-139.
- 22) Park KH(2006) 老人福祉施設を利用する高齢者の成功的な老後に影響を及ぼす要因に関する研究, 学位論文.
- 23) 嵯峨座晴夫(1993) エイジングの人間科学, 学校社.
- 24) Schultz R, Heckhausen J(1996) A Life span model of successful aging, American Psychologist, 51(7), 702-714.

- 25) Strawbridge WJ, Cohen RD, Shema SJ, Kaplan GA(1996) Successful aging: Predictors and Associated Activities, Am J Epidemiol 144, 135-41.
- 26) 谷井康子(2001) サクセスフル・エイジング概念分析, 日本看護科学会誌, 21(2), 56-63.

SHORT PAPER

A Literatural Study for Development of the Japan Elderly Successful Aging Scale

Moonjung KIM¹⁾ Changwan HAN²⁾

1) Graduate School of Economics and Management, Tohoku University

2) Faculty of Education, University of the Ryukyus

ABSTRACT

This study is Critical Review of Successful Aging for Development of the Japan Elderly Successful Aging Scale. Recently, growing more and more interested in Successful Aging because elderly society and growing needs for happy old age. However, the definition about Successful Aging or happy old age is depends on researcher. And, it is influenced by social cause or cultural diversity. So, we need to development of Successful Aging evaluation scale factor in Japanese cultural and social cause.

The results of the critical reviews, there is lacking in research about Successful Aging and the scale for evaluation is not influenced by Japanese cultural and social cause. On the basis of the above critical reviews, we suggest following tasks for Development of the Japan Elderly Successful Aging Scale. Firstly, it should define neatly about the Successful Aging reflect the Japanese cultural and social character. Secondly, stand in need of standard and scale to measure Successful Aging only for Japanese elderly. Lastly, create preliminary measure basis of definition and standard that the d reflect Japanese cultural/social character. And through test of validity, we should be develops an Japan Elderly Successful Aging Scale.

<Key-words>

Successful aging, aging, aging society, successful aging scale

moonjung87@gmail.com (Moonjung KIM)

Total Rehabilitation Research, 2014, 1:76-86. © 2014 Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

— Editorial Committee —

Editor-in-Chief JAPAN Atsushi TANAKA University of the Ryukyus

Editor-in-Chief KOREA Changwan HAN University of the Ryukyus

Editorial Board

Hideyuki OKUZUMI	Tokyo Gakugei University
Nagako KASHIKI	Ehime University
Yuichiro HARUNA	National Institute of Vocational Rehabilitation
Hyunuk SHIN	Jeonju University
Eunju LEE	Director, Dobong Senior Welfare Center

Total Rehabilitation Research VOL.1

発行 平成 26 年 2 月 28 日
発行人 Keiko KITAGAWA ・ Youngjin YOON
発行所 Asian Society of Human Services
〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1
TEL/FAX 098-895-8420

定 価 ￥2,000 円 (税別)

*落丁・乱丁本はお取り替え致します。

*本書は、「著作権法」によって、著作権等の権利が保護されている著作物です。本書の全部または一部につき、無断で転載、複写されると、著作権等の権利侵害となります。上記のような使い方をされる場合には、あらかじめ本学会の許諾を求めてください。

Printed in Japan

Total Rehabilitation Research

VOL.1 February 2014

CONTENTS

REVIEW ARTICLES

The Significance of Comprehensive Rehabilitation..... **Masahiro KOHZUKI** · 1

A literature review on non-pharmacological intervention and risk factors for mild cognitive impairment..... **Minji KIM**, et al. · 12

ORIGINAL ARTICLES

Influences of Stimulus Array, Stimulus Material, and Severity Level for Intellectual Disability on the Cancellation Task in People with Intellectual Disabilities..... **Ryotaro SAITO**, et al. · 23

Consideration of support for the actual conditions of education informatization that use of ICT in special needs education in Japan..... **Sunhee LEE** · 29

A Study of Consideration for Employment of Persons with Disabilities in the Field of Education..... **Kohei MORI**, et al. · 42

Current Situations and Issues on School Consultations for Regional Support by Special Needs Schools : Based on a Comparison of School Consultations with School Counselors..... **Hikari ISHIKAWA**, et al. · 57

SHORT PAPERS

A Literatural Study for Development of the Japan Elderly Successful Aging Scale..... **Moonjung KIM**, et al. · 76

Prevention of Bed-bound in the Elderly: A Literature Review..... **Chaeyoon CHO**, et al. · 87

Investigation of Special Needs Students School Library..... **Haruna TERUYA**, et al. · 95

CASE REPORTS

Research on Teaching Methods for Enhancement of Autistic Student's Volition and Motivation to Learn: Through Lesson Practices for Using Audio-visual Equipments..... **Kazumi SUGIO**, et al. · 105

Processing Model of Problem Solving in Children with Autism Spectrum Disorder: Based on a Case Study of Learning Support for a Fourth Grader Girl with Autism Spectrum Disorder..... **Noriyuki AGARIE**, et al. · 115

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan